

季節のおまつり

尾張津島天王祭

愛知県の津島は木曾三川を跨いで尾張と伊勢を結ぶ要衝「津島湊」として発展してきた。名鉄津島駅から十五分ほど歩くと、「延喜式」にも載る津島神社の堂々たる楼門が見えてくる。豊臣秀吉が寄進した桃山式の楼門である。津島神社は「西の京都八坂神社、東の津島神社」と言われ、古くは牛頭天王社とも呼ばれた。疫病退散、災難除けの神として全国三千社ある天王信仰の総本社である。



朝祭 提灯を外した津島車

津島祭は宵祭（提灯祭）と翌日の朝祭（車楽祭）が七月の第四土曜日と翌日に行われる。今は池になつてゐる天王川公園を舞台に、津島旧五カ村の「津島車」と呼ばれる五艘の提灯船が、中央に真柱を立て半円形の傘のように一年の月数、その下に一年の日数、更に絹灯籠など約五百個の提灯をかけ、津島樂を奏でながら丸池に一艘一艘滑るように漕ぎでてくる。やがて五艘が揃うと夏の夜空を花火が彩り、提灯船の灯りが川

面に揺らめくさまは幻想的で、さながら水上の祇園祭のようである。

明けて迎える朝祭では、夜中のうちに提灯を取り払い様変わ

りした津島車の屋台の上に、等身大の能の演目の衣装をまとつた能人形が据えられ、先頭の津島車は高砂と決まつてゐる。宵

祭には参加せず待機していた市

江車は祭神に縁のある旧市江村

から出る。合わせて六艘の車楽

船は水上を悠然とお旅所へ向か

う。池の真中辺りにくると、先

頭の市江車から十人の鉾持ち

（未婚の男子）が布鉾を背負つ

て水中に飛び込み、対岸のお旅

所を目指す。泳ぎ着くと神輿に

拝礼し、神社まで走り布鉾を奉

納する。鉾を使って神が悪霊を

退散させるためと言われている。

夏の夜のひと時、別世界に飛び込んだような津島祭は日本三大

川祭の一つに数えられている。

（写真・文 宮本卯之助）



丸池に漕ぎでてくる提灯船

浅草（神社の氏子）の 人は雉肉を食べない

かつて、そんな禁忌が浅草の人々に伝わっていました。雉肉を扱う店も明治以前には浅草寺領内に一つもなかつたそうです。昔の浅草の人にとって、雉の存在とはどんなものだつたのでしょうか。古来より日本人に関わり深い鳥として国鳥でもある雉ですが、伝説によれば浅草寺本尊御示現の際、数羽の雉が自らの羽で御守護し、その姿は親が子を守るかごとくの御姿だったと云われるこ

とから三代目将軍家光公は浅草寺再建の折、御厨子の破風下に翼を広げた雉の木彫を作らせたという話があります。親が子を思う「焼け野の雉子、夜の鶴」のたとえ話からも慈悲の権化、そして守護する大切な存在として守る心意気、なんとも浅草人らしさと感じられます。

祭りとともに

和楽奏伝プロジェクト

二〇一七年十一月横須賀にて初演を行ない、本年五月には「MUSIC TRUNK」というテーマにて、横浜赤レンガ倉庫にて第二弾を開催しました。「和楽奏伝」とは、読んで字の如く「和の音を奏で伝える」こと。太鼓、篠笛を

中心に毎回テーマを決めて演奏を行います。五月の公演「MUSIC TRUNK」では、ただ単に太鼓の迫力のある演奏だけではなく、笙や簫篥と雅楽を奏でたり、日本の豊かさ、また自然とともに生きるあたたかさを感じる公演となりました。今後も続いていく「和楽奏伝」、ぜひお楽しみに。



世界の太鼓館 「世界の太鼓資料館 太鼓館」開館三十周年記念として 貴重な収蔵品をご紹介。 セヌフ族の太鼓



西アフリカのコートジボワール北部とマリ南東部に暮らすセヌフ族の祭礼用の太鼓。高さ九五センチメートル、鼓面二五センチメートル。胴は一本の木から削り出されたもので、木の楔で獸皮が張られています。子孫繁栄の願いのシンボルである宝貝が四方に飾られ、鼓面部には蛇、鳥、ワニ、魚、鳥獸のレリーフが浮き彫りで描かれています。豊満な女性像は椅子に座わった状態で、荷を運ぶように手を高く上げて鼓面部をバランスよく頭と手で支えていますが、台座となっている椅子の脚四本のうち、前面二本は女性の脚として彫られているため、正面からみると女性像がどっしりと大きな荷を担いで立っているようにもみえます。この太鼓はコミュニティの中で自立した大人として認める女子の成人儀式に特に使用されたもので、太鼓そのものから女性の力強さも強く感じられます。

祭と伝統芸能の保存と発展を考えた時に、より多くの方々に知つて頂き、体験して頂く事は大切な課題になります。舞台での意味でとても効果的とも言えます。しかしながらその反面、実際の土地を離れた瞬間から、それは「本物」ではなくなってしまいます。もう一つの課題は、元来その土地の人々のものである芸能を土地の人間以外が演奏していく事の是非です。高齢化や過疎化の中、普及と継承は促進したいが、芸能 자체が変質してしまう事は困る。こうした問題については考え方は様々で、絶対解はないでしょう。今回ご紹介した和楽奏伝は、民俗芸能そのものを舞台に上げる事はせず、豊かな民俗芸能の土壤の上に現代の私達が表現できる舞台を目指し、楽曲作りから始めました。その一方で積極的に祭や芸能に対する興味を喚起して、SNSなどを通じて現地に行く価値を伝えたいこうと考えています。

代表取締役社長

宮本芳彦

行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-1035 東京都台東区西浅草二十一 電話 (03)3384-4122
	www.miyanoto-unosuke.co.jp